その樣なことがあるわけは無いと思ふのですが……然しどうして姉樣はあの樣なことをお知りなのからん』

四隣が森として居るので、所々は聽き取れないが、靜枝のかき口說くことが兎に角聽き取られた。靜枝の机の前には一葉の寫眞らしいのが置いてある。他分清水のらしい。女だもの、われと全じやうに戀を思切ることは切ないに違ひないと、國江は全情に堪えなかつた。そして主筋に當る靜枝に、かく不德義な行ひをした、わが罪惡を考へて見た。然し國江の負けし魂は、妹ーと云ふ幾年かの間假りに名附けられた靜枝の前に、平伏して謝罪する決意が鈍つた。

『妾、靜枝さんにどうしてお詫が出來ないのでせう』

密とこの室の前を立去つて、今度は永田老夫人の室へ行つた。母ならスツカリ打明けて詫が出來ると思案したらしい。そして轉げるやうに室の内へ駈け入り

『お母さん！』と悲しさうに呼びかけた。

『オヤ國江かえ、夜分遲く何のご用……？』

『妾は實に惡い事をいたしました』

母親は意外な風して眼を睜り乍。

『えゝ！』訊ね返へすと。

『お母さん私が今日言つたことは、殘らず嘘でした、何うぞお許し下さいませ』其場にひれ伏した。感情の强いそして、勝氣な國江はどう

かすると非常に良心の苛責に逢ふこともあれば、時としては極端な感情發現を、赤裸にすることも珍らしくはないのだ。母は

『まあ、嘘を、何んでそんな事をするのです』呆れ果てた如く言つたまゝ、眤と國江の姿を眺めてゐましたが、心の中では『何んといふ情ない心の女だらう、私は靜枝と全じやうに、わが子として育ててゐた筈だのに、矢張り僻が起るのかしら、氏と云うものは爭はれないものと見える』國江を憎む心よりは、むしろ怨めしいやうな氣が起つて來るのでした『私は何にも言ふまい、お前が惡いと言へば、それで許します、えゝこれからも有ることだから、充分氣をつけておくれ』

如何なる場合にても、寛大に過ぎる程やさしいのが夫人の性質でし

た。それが國江には折檻を受けるよりも辛かつたか知れないのでした國江は母の前を辭して、わが室に這入つたが、良心の苛責はそれからそれと、きびしく責めるのでした。机の引出から卷紙をとり出して、何事か長々とかき認めた。この時には國江は折りを見て死ぬつもりであるらしかつた、さてのの用向が終ると漸く心が落付いて、今度は谷川のことを考へて見た。清水のことも考へて見た。そして最後にわれとわが取るべき現在の方法としては『どうしても死と云ふことで、その罪を償はなければならない、どうせ死ぬと考へたなら、清水の口から只一言、お前を愛すと云ふ言葉がききたい。一刻でも半時でも靜枝の手から清水を取去り、そして死を以て詫びたい』と斯う考へるのでし

た。それは死と云ふもので總てを洗ひさることが出來るならば、當然の事らしく考へたので、國江は清水をわが者にしたいと云ふ切ない思ひが、ムラ〳〵と湧き出づるのであつた。戀と云ふ強い強い感情は、理性や常識で決定がつくものではない。それに若い乙女の險い戀が生ずるのであらう、死と云ふことが決しても、直ちに之を決行しなかつた。國江は、こう云ふ果さねばならぬ事件が前に有たからであつた。だから谷川に銃口を向けられても、少しも怖くなければ、別に危險から免れやうともしない。寧ろ歸するが如く、死に就いたのであつた。

【二八】 悲しい告白

谷川は國江を殺してしまつた。宛ど意識さへ辨へぬやうに清水の家

を訪うた『君、僕は大變の事をして仕舞つたよ』

清水は谷川の大變と云ふことは、きき知つて居るので、そんなには驚かない。いつも誇大かと考へてゐるらしい。

『君、僕は病氣療治中の身体だよ、餘りに驚かせん樣にして呉れ、どうした、旅行を企てやうとする矢先、何か故障でも起つたのかい』

『もう海外遊學も何もありやしない……僕は非常なる事件を引き起して仕舞つた』

今日丈けは、谷川の口吻と云ひ、態度と云ひ、いつもとは非常に相違して居ると云うことを知ると共に、清水もやゝ不安の念に堪えないので、急に眞面目にきくやうになつた。

「一体どうしたのだ、それに顔色も大變惡いぞ……えどうしたんだ」

谷川は、いつも浮いた調子が七八分を占めて居るらしいのに、今日はその樣な風が少しもない、注意して見れば、眼は充血して居るし、眉の間にも押え切れない憂ひが漂つて見えた。

『谷川君どうした、日頃の君の氣質とは宛で違つて居るではないか』

『違つて居る……』

いつもは清水の言葉が少なくつて、谷川の言葉が多いのであつたが今日は全くその主客を顚倒して居た。

『清水君、葡萄酒があつたら一杯』非常に重大の事件を語るために、その精神を引立てやうと苦慮したらしかつた。清水は無言でボルドー

を一杯酌んでやつた『誰も居ないか』

『居ない……』

彼は舌をうるほした。そして悄然と『清水君、僕は殺人罪を犯した』

清水の顏はサツト變つた、そして無言つて谷川の顏を見詰めて居た。

『つひ殺人の大罪を犯した、もう駄目だッ』捨鉢に斯う云つた。

『谷川君、マア落付いて話して見ろッ』

『僕は血迷つては居ないつもりだよ。今日永田家の奥庭へ這入り込んで國江を殺したんさ』

清水は恐らく生れて以來この樣なことをきいたのは、初めてあらふ、

『えゝ國江さんを殺したッ……』

『左様、一撃の下に殺したよ。戀のために』谷川は今日有りし事を語つた『僕はこれから自首しやうと思うのさ、自首して後、僕の無意味であつた生の訣別を君にだけでも告げやうと思つて、やつて來たのさ』

谷川は割合に取亂して居なかつた、清水はやゝ半時近く頭を押えて考へて居た。そしてやがて深い溜息を吐いて

『成程、君が全く殺したとすれば、左様するより外には採るべき方法はないかも知らぬ、だが谷川君、それは君が採るべき最後の手段だ。最後の決心か人間について居る以上は、早速急いでするにも當るまい兎に角僕に任せたまへ、幸、永田の當主とは僕は知つて居る中だ、一つ逢つて詫して見やう、お互にかうなれば、生命より名譽が大切さ、

永田家でも名譽を保留する上から、君が一僕の活路を見出しえうれぬとも限らないさ、永い間では無い、一日の猶豫をし給へ』

清水は思慮ある性格の男、斯う云う場合に應變の所置を取るには、極めて適當であると云ふことは、谷川もよく知つて居る。

『君、永田へ行つてどうする』

『マア兎に角行つて見やう、臨機の所置を取るとしやう、暫らく待つて居たまへ、清水は車を飛ばして永田家へ駈け附けた。

永田家では一家がその死骸を擁して途方に暮れて居る所であつた。清水は當主直行に面會した。直行は改まつて。

『ヤア清水さんか、よくお出で下さつた。實は只今君の所へ使を立て

やうとした所でね、國江は自殺致しましたよ』

清水は引繰り返へる程驚いた。

『國江さんが自殺、それは全くですか……』

『これを見て下さい、國江の死んだわけが判り升よ……貴所にも關係があるから、御一覽下さい』

渡された手紙を手にした清水は、

『拜見いたしても宜しいのですか』

『差支ありません……』

清水は震へる手で、手紙を擴げた。見ると

『……死に望んで國江は申譯を致さなければなりません。妾は世にも

恐ろしき罪惡を犯したのです。妾は谷川と云ふ男と言ひ交はして置いてあるにもかゝはらず、妹の戀の相手の清水さんに道ならぬ戀慕を致しました。清水さんを妾の者にしやうと致しましたが、靜さんと清水さんは互に相愛する仲でした、もう羨ましさに堪えないのでした。そして淺ましい心から、清水さんの事を針少棒大に中傷したのです。そして靜さんの結婚に邪魔を入れて、妾の手に清水さんを取らうとしたのです。さぞ不都合の女とお下げすみでございませう、それは万々承知して居り升が、戀に捉はれた妾には、人間らしい行ひは少しもなかつたのです。靜さんにも、お母さんにも清水さんのことを惡ざまに申しました所、妾の企みは成就して、兩人の緑談は破れて仕舞ひました

この時妾は云ひ知れぬ誇りを覺えましたので、此度は清水さんをわが手に入れやうと、目論で居ましたのです、その時妾は不圖鈴藤作から初めて私の身分をきいたのです、今迄私は自分はここの娘だとばかり思つてゐました、靜さんを妹と許り思つて居りました所が、實は左樣ではなかつたのです、お母さん（どうぞお母さんと呼ばして下さい）の厚いお情けで、靜さんと分け隔てなくお育て下さつたことを知りまして、私はもう立つても居てもをられないのでした。そして、なぜこの身に、罰が當らないのかと思う位でした。世の中に恩を仇で歸すと云ふ事がございい升が、私の身の上は誠にそれなのでした。どうしてこのお詫をいたさうと、私は一人でいくら考へたか知れません、然しいくら考へた所が、その罪の消える筈はなく、考へれば考へる程罪が深いのです、もうこの上は死んで皆樣にお詫するより外には有りません妾は死んで皆樣に罪を謝するつもりでございい升……

清水は讀み乍ホット溜息をついた。

『……妾の最後のお願をきゝ入れて下さい、行くれに數かくよりも果敢ない妾の戀はもう斷念めて仕舞ひます。只女の狹い願ひから一日でも靜さんの手から清水さんを、もぎ取つて、私が戀の勝利者とならうと考へた心をスッカリ斷念めて仕舞ひましたのです……』

清水は擴げ行く手も、とかく震へ勝ちであつた。

『……未練だとお笑ひ下さるかも知れませんが、どうぞ妾が死んだ後

で、靜枝さんと清水さんの口から「國江を愛す」と仰言つて頂く樣にお願ひして置きます。又お母さまには永い間の育ての恩をお報いも致さず、死んでの後まで御手數をかけます罪は、せい〳〵お許し下さい升せ……申し上げたいこと、書きたいことは澤山ございい升が、何か何だか自分で自分が分らないのです、皆樣に妾が變つた姿でお目にかゝる時には、この手紙も皆樣のお目にふれると存じてをります、吳々も申し升が、どうか、靜さんと清水さんとの結婚を再び取結びますやうこれは死ぬる間ぎはの私のお願です……」

何と云ふ悲想な告白であつたらうか。清水の顏色は蒼青に變つた。

「スルト國江さんは、自ら覺悟してお果てなされたのですか」

「左樣なんさ、今朝國江が死んで居ると云ふので、僕は裏庭へかけ附けたのです、スルト國江が最早こと切れたのでした。實際驚きましたよ、國江が心臟をわれとわが討つたのでせう、傍にはピストルが落ちて居りましたのです。何しろ乳母の子をこの家へ養子にして、可愛想だから永久に

悪しい告白

知らせず置かうと思つて居りましたが、藤作の口より洩れたために、こんなことになりました。清水さん寧ろ憐むべき女ではありませんか」

清水は思ひに沈んだ。然し心中には

「罪は罪としても、戀はかく強いものか」と沁々感じた。

※　※　※　※

かくて數月の後、清水と靜枝との結婚は盛大に擧行された。ある日曜日のことであつた。新郎新婦は永田家の新しき墓に參詣した。この時、一組の夫婦より先に墓前に跪いて參拜して居る青年があつた。それは谷川清であつた。聽て谷川は英國へ留守の門出をした。

新乳姉妹（終）

大正八年十二月三十日印刷
大正九年一月五日發行

（やなぎ文庫）
不許複製
定價金三十五錢

編輯所　柳文庫編輯部
編輯兼發行者　東京市淺草區三好町七番地　大川錠吉
印刷者　東京市淺草區南元町廿六番地　川崎清三
印刷所　同所　大川屋印刷所

發行所　東京市淺草區三好町七番地　大川屋書店
（電話下谷一五七三番、振替貯金口座一〇〇九番）

MADE IN JAPAN.

□悲劇
少説

柳文庫

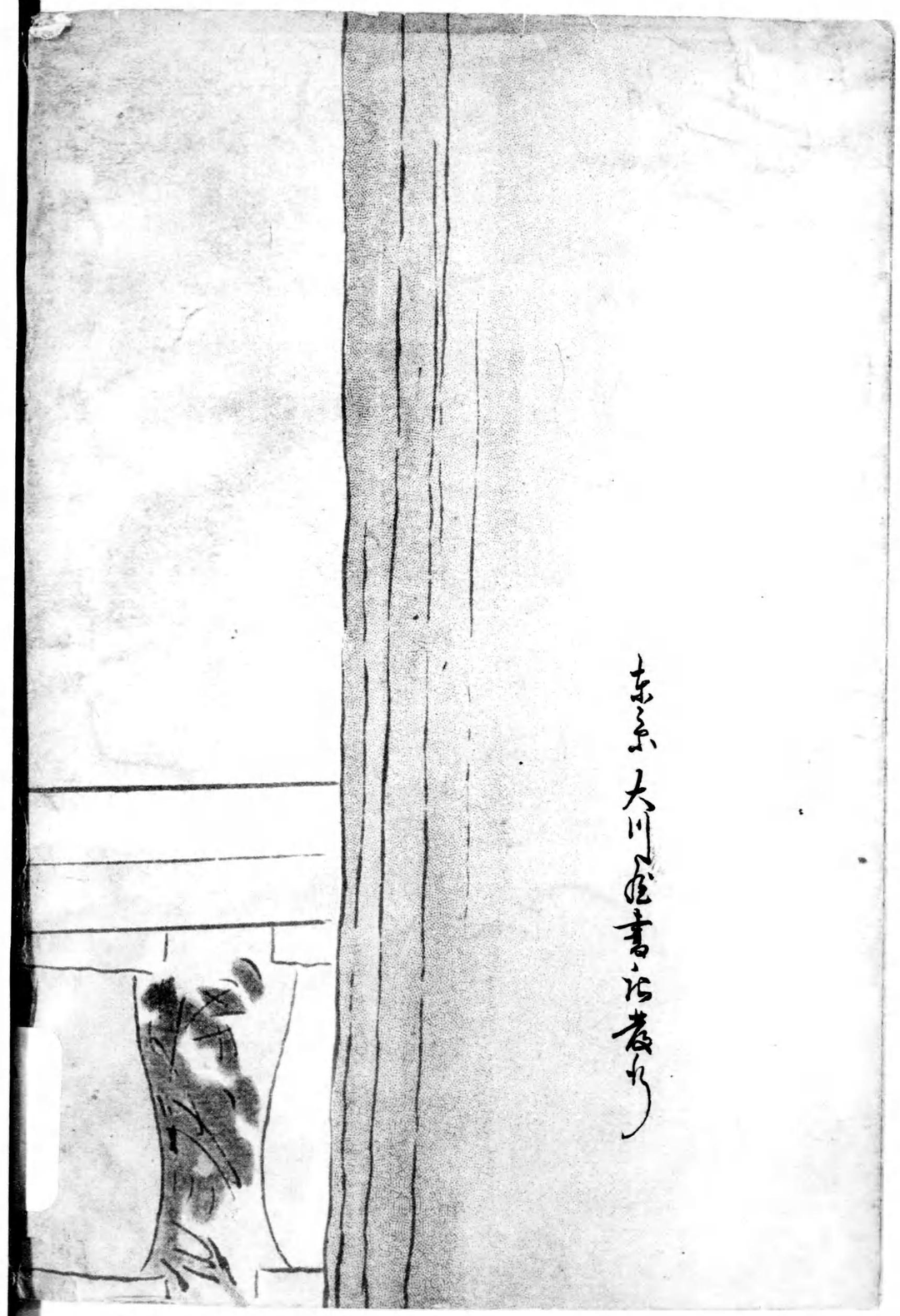
四六判頒美裝紙製二百餘頁
大判極彩色口繪入
木版畫數個挿入
定價每冊金拾五錢郵税四錢

發刊目次

1 新ほと〻ぎす 尺草著
2 新金色夜叉 尺草著
3 新なさぬ仲 格葉著
4 新己が罪 白鳳著
5 悲劇小説 あさみ草 高山著
6 悲劇小説 渦卷く涙 春水著
7 悲劇小説 須磨の松風 山雪著
8 新さくらの家 流月著
9 新乳姉妹 愁雨著
10 悲劇小説 戀の魔風 尺草著

▼以下續々發行

大川屋發行



終